

# Kanazawa Cultural Resource Studies

No. 20

Living with a World Cultural Heritage Site

edited by  
NOZOMU KAWAI, RYUICHI TANIGAWA

金沢大学 文化資源学研究所 第20号  
金沢大学人間社会研究域附属 国際文化資源学研究所センター



# 文化資源学研究

第20号

世界遺産と共に生きる

河合 望・谷川竜一 編



Center for Cultural Resource Studies  
Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University



金沢大学人間社会研究域附属  
国際文化資源学研究所センター

# 世界遺産と共に生きる

河合 望・谷川竜一 編

金沢大学人間社会研究域附属  
国際文化資源学研究センター

# Living with a World Cultural Heritage Site

edited by

NOZOMU KAWAI, RYUICHI TANIGAWA

Center for Cultural Resource Studies  
Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

# はじめに

—なぜ「世界遺産と共に生きる」のか—

金沢大学新学術創成研究機構  
文化遺産国際協力ネットワークユニット  
河合 望・谷川竜一

## 1. はじめに

本論文集は、2017年1月28日に金沢市文化ホールで開催されたシンポジウム「世界遺産と共に生きる」をきっかけとして編まれたものである。同シンポジウムは、金沢大学新学術創成研究機構・文化遺産国際協力ネットワークユニット（ユニット・リーダー：河合望、以下、文化遺産ユニット）の主催、国立民族学博物館・金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究所・金沢大学超然プロジェクト「文化資源マネジメントの世界的研究・教育拠点形成」の共催によるものである。本論文集の説明に入る前に、同シンポジウムの主催者であり、本論文集の編者でもある新学術創成研究機構・文化遺産ユニットをまず紹介したい。

新学術創成研究機構は、新しい学問分野・学問領域の創成につながる学際的な研究を推進することを目的として2015年4月1日に金沢大学に設置された研究機構である。3つのコア部門からなり、その中には合計16のユニットが設けられている。その「未来社会創造コア」内に文化遺産ユニットは属している。

文化遺産ユニットの目的は、文化遺産の保全や活用をテーマとし、国際的な観点にもとづきながら多様な専門家や市民と連携することで、よりよい未来を多くの人々と共に創造していくことにある。特に金沢大学は国際文化資源学研究所を中心に、世界各地の有形・無形の文化遺産を中心とした研究がさかんであり、関連する人材・知見の厚みは国内有数と言ってよい。当然、同センターのスタッフも文化遺産ユニットに参画教員としてメンバーに加わっており、設立以来2年の間様々な活動を共同して行ってきた。そしてその一環として企画されたものが、2017年1月に開催されたシンポジウム「世界遺産と共に生きる」である。このシンポジウムでは文化遺産ユニットの目的の一つである、文化遺産を活用したよりよい社会の実現を念頭に、特に世界遺産と地域社会の関係性に絞って議論を行った。

## 2. 世界遺産とわたしたち

世界遺産とは、日本ユネスコ協会連盟の定義によれば「現在を生きる世界中の人びとが過去から引き継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産」である。このことは多くの人々が認識しているが、それではこの定義を思い浮かべる時に、世界遺産制度を支えているユネスコの理念まで立ち返って考える人はどのくらいいるだろうか。試みにユネスコ憲章を紐解くと、「諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関」とある。ユネスコの目的の核心には、国際平和と人類の福祉の促進が謳われているのである。このことを踏まえれば人類共通の遺産としての世界遺産は、世界平和と人類の福祉の促進という目的の下に存在していると言ってよい。私たちは文化遺産——特に世界遺産を通して、紛争や衝突が終わらない世界を平和へと導き、貧困や不幸のふちにある多くの人々の苦しみを緩和していくことを、求められているし、求めているのである。

それに対して、単に世界遺産を増やしたり、世界遺産の歴史的な理解を深めたりしていただくだけでは当然十分ではない。ここ十数年日本は世界遺産ブームといってもよい状況にあるが、それが必ずしも前述の目的を満たしているとは限らないことを、日本社会に生きる私たちの多くはすでに知っている。世界遺産を利用したやみくもな観光開発、歴史認識問題と言えるようなナショナリズムや排他的なシンボルとしての世界遺産の利用に始まり、地域住民の生活の破壊や、保存という名の遺物の改変など、細かく挙げていけばきりがないだろう。世界遺産は、手放しでは平和や福祉の促進に必ずしも貢献しないのである。

やっかいなことは、こうした問題に対する解答を一意に導けないことである。それは世界遺産がはらむ問題群が、客観的な歴史科学の範疇というよりは、流動的で主観的な社会や人々の「間」にある問題であるからだ。したがって、ケースバイケースでそれぞれの課題を紐解きながら、細かな知見や情報の交換、問題の構図に対する思考整理などを共同で積み重ねていくしかない。ますます文化遺産をめぐる国際協力、ネットワークの重要性が高まっているのである。

したがって文化遺産ユニット——冒頭で述べたように正確には文化遺産国際協力ネットワークユニット——の使命として、こうした課題と向き合っている人々を繋げ、文化遺産を通じた取り組みを社会や人の連帯へと展開していくことが必要であると考えている。

以上のような問題意識と動機を背景として、本論文集およびそのもととなったシンポジウムでは、世界遺産という「大文字」の遺産と、地域社会という個人が集う一般化できない社会の問題をまず考察することとした。

### 3. 本論文集の構成

本論文集は、4つの論考からなる。

1つ目の谷川論文は、日本で最初に世界遺産登録された法隆寺と、それを抱えるまち斑鳩町のまちづくりに着目している。日本の古代や国の成り立ちを示す重要な文化財であり、国宝や世界遺産として絶えず法隆寺が注目を集め続けてきたが故に、斑鳩町の近現代の文化遺産はむしろ注目されずにきたことが論じられている。そうした課題を解決していくために、同町にある近現代の建築悉皆調査を行い、その成果を発表すると同時に、それらを住民の生活と絡めて価値付けしていくために古写真のデータベースを構築・活用している事例である。

2つ目の前島論文は、ブッダガヤが世界遺産となったために変容していく過程を、フィールドワークなどから情報を丹念に拾い上げて論じたものである。ブッダガヤを世界遺産とすることは、仏教という特定の宗教をクローズアップすることになり、それ以外の宗教やそれを信仰する人々との間に分断をもたらすことになった。そうしたなかで多様性を担保し、地域の文化遺産としてブッダガヤを調和ある姿で形成していくにはいかなる認識が必要とされているのか。前島の視線は地域に寄り添っている。

3つ目の菅原論文は、トルコのカップドキアの遺産の保全・活用状況を詳述したものである。菅原の論考を読めば、カップドキアの多くの岩窟が、破壊や喪失の危機に瀕していることが分かるだろう。その危機はひといきには解決できないような、歴史的に積み重なった問題であり、同時にトルコ国内外の社会的問題と密接にリンクしていることが理解できる。それは観光で訪れる私たちが及ぼす問題でもあるのだ。それに対して菅原は、ガイドの教育に始まり、最新のデジタル技術を使った遺跡の記録・公開まで、多様な取り組みを行っている。文化遺産の保全をめぐる活動は必然的に多面的な作戦とならざるを得ないのだ。

4つ目の河合論文は、エジプト・ルクソール西岸の遺跡に暮らし続けたクルナ村を対象としている。テーベ・ネクロポリスが世界遺産登録されると、傍にあったクルナ村の人々は、自然災害なども相まって段階的に移住させられ、今世紀初頭には強制的に移住させられただけでなく住居のほとんどを撤

去されてしまった。まさに約200年遺跡に暮らしていたクルナ村の文化的景観の記憶を抹殺してしまったのである。河合は論文の最後で、クルナ村そのものも考古学研究を支えてきた存在の一つであることを指摘しつつ、村を文化資源という観点からも残すことはできたのではないかと述べている。それは発掘を先導してきた考古学研究者たちがたどりついた歴史のかつ内省的な視点であり、他分野の研究者もこの論文から共有できるものが少なくないであろう。

以上のように、本論文集では日本、インド、トルコ、エジプトといった世界の様々な国や地域を対象に、世界遺産と地域社会の関係が縦横に論じられている。共通していることは、地域社会の未来が世界遺産によって壊されたり、そこで生きる人々の歴史を失うことになったりしてはいけないという地域に即した認識であり、まなざしである。

文化遺産という認識や制度の問題が先鋭化して現れる一つの極北が世界遺産であり、そこにおける取り組みは整理の仕方次第で多様な現場に還元される可能性を持つ。文化遺産ユニットや国際文化資源学研究センターでは、こうした文化遺産をめぐる知見や手法、技術をより普遍化・一般化し、体系化していく必要があると考えている。そしてそれは従来の歴史研究者だけではなく、工学や自然科学の研究者らが乗り合うことのできる、新しい学問分野として生まれ出でる可能性を持っている。本論文集はそのための一つの重要な布石として筆者らはとらえており、手に取ってくださった読者諸賢には、今後もぜひとも本活動にお力添えをお願いしたいと思っている。



## 目 次

はじめに一なぜ「世界遺産と共に生きる」のか	i
目 次	v
1. 世界遺産と地域の遺産をむすぶまちづくり 一斑鳩の記憶アーカイブ化事業による文化遺産の把握と活用 谷川竜一・松本康隆	1
Connecting World and Local Heritage: Archiving Town Memories of Ikaruga Town Ryuichi Tanigawa, Yasutaka Matsumoto	
2. 仏教最大の聖地ブッダガヤの世界遺産と地域社会－問われる「世界遺産」の行方 前島訓子	15
World Heritage and Local Community: Vectors in the Construction of World Heritage in BodhGaya Noriko Maejima	
3. カップパドキアにおけるキリスト教聖堂群の文化資源的な活用に向けて 菅原裕文	27
For Utilization of Christian Churches in Cappadocia as Cultural Resource Hirofumi Sugawara	
4. エジプトの世界遺産ルクソールの古代遺跡とともに生きる人々と地域 河合 望	39
The World Cultural Heritage site in Luxor, Egypt, and its Living People and Community Nozomu Kawai	
シンポジウムの記録	47
1. 当日の写真	
2. ポスター	
編集後記	49
著者プロフィール一覧	50